株式会社クレアテラ

取捨選択も含めて先を読みながら知財を戦略的に考えたい

土壌改良、屋上緑化、水質浄化、粉塵飛散防止、硫化水素除去など、
環境改善に関する資材の開発･製造･販売を通じて、
より良い未来社会に対する提案を行っている。
さらには、水質浄化用のリン吸着技術を発展させて、腎不全患者が抱える
高リン血症の問題を予防する研究に吸着材を提供するなど、
医療の世界でも社会に貢献しようとしている。

主な権利

1997年：商標登録 第3361977号
1999年：特　許　第2937876号
2011年：特　許　第4726443号
2012年：商標登録 第5526133号
2014年：特　許　第5456075号

会社概要

所在地：東京都世田谷区松原 6-39-18
電　話：03-5300-2501
ＵＲＬ：http://www.createrra.co.jp
業　種：屋上緑化や水質浄化など環境資材の開発・製造・販売
設　立：1975 年（昭和 50 年）
資本金：1,000 万円

代表取締役：柳田 友隆さん

土壌調査からスタートした屋上緑化技術のパイオニア

株式会社クレアテラは、1975 年に建設コンサルタントとして会社を設立。コンサルタント業務や都市緑化技術の開発を始めた。農学博士でもある柳田社長は、会社設立の背景について、こう語った。「設立当初は、土壌の調査などに携わっていました。ちょうど、造成された多摩ニュータウンや、海浜埋め立て地の緑化を進める大きなプロジェクトがあり、従来の方法では植物がうまく育たないという問題がありました。それで、私たちが土壌調査の必要性を提案したところから、仕事が成り立つようになりました。また、今から 30 年ほど前に、造園業者から屋上緑化の依頼がありました。それまでは、屋上に樹木を植えようとすると、1m² 当たり 1.5ton というような大がかりな地盤をつくる必要がありました。そこで、私たちはその 10 分の 1 ぐらいの重さでできる人工軽量土壌を開発し、さらに壁面緑化も可能にしたんです」

今では当たり前のように各所で取り組まれている屋上緑化に先鞭をつけた会社である。もちろん、「エコ」という言葉がまだ浸透していない時代のことだ。

水質浄化の技術によって海外の人々の命を助ける

同社は水質汚濁の解決にも貢献している。水の中にリンが多いと、アオコが多く発生する。そこで「p-catch」という、水質浄化用のリン吸着材を開発した（p はリンの元素記号 P を表す）。東北歴史博物館内の観賞池など、さまざまな場所でこの吸着材が活躍している。「吸着材を入れてからは、池の底まで見えるようになり、たくさんの鯉が泳いでいるのがわかったこともあるんです」と、柳田社長。そして、この技術はバングラデシュにも届けられる。「ヒ素が多い土壌のため、井戸水の中にもヒ素が多く含まれており、これが住民に深刻な健康被害をもたらしています。そこで今度は、ヒ素を吸着できる『As-Catch』を開発しました。現在、公社国際化支援室のサポートを受けて、販路の開拓をしているところです」

人の命を支える技術も、長年のノウハウがあってこそ生み出されたものだ。

植物栽培の楽しみを広げる「傾斜プランター」を開発

このように環境分野で活躍している同社の新たな取り組みが、「傾斜プランター」だ。ガーデニングのプランターが傾斜した構造になっているため、省スペースで日当たりがよく、植物がすくすくと成長できる。また、袋入りの整形培養土を使用しているので、コンパクトに栽培できるのも大きな特徴だ。面積効率が非常に高いため、自宅の庭やマンションのベランダ、屋上はもちろん、レストラン内でも野菜を自家栽培でき、今までより、ぐんと使われやすくなっている。「野菜やイチゴ、ハーブの栽培試験の結果もよくて、今後がとても楽しみです。期待している商品なんです」と、柳田社長は微笑む。

新たに開発し、特許を出願した「傾斜プランター」の両流れタイプ。水やりをすると、オーバーフローしたものが上から下へ効率よく落ちていくしかけにもなっている。

「傾斜プランター」の片流れタイプ。自立式であり、壁面を活用した栽培にも効果的である。

水質汚濁や悪臭の原因となる、アオコなどの植物プランクトンの繁殖を防ぐために、水中のリンを吸着・除去する「p-catch（ピーキャッチ）」。

「p-catch」は、日本水環境学会の平成21年度の技術賞を受賞。東北歴史博物館、グランドプリンスホテル高輪、ホテルオークラ神戸、寒川神社など、多くの池の浄化に貢献した。

ちょっとした文言の変更で特許の権利範囲がぐんと広がる

この新商品「傾斜プランター」の特許取得の件で、知財センターへ相談に行った。そのきっかけは、ヒ素の吸着材の件で知り合った公社国際化支援室の担当者の紹介だ。「それまでは、専門性があり難しい特許出願は特許事務所に依頼し、比較的容易にできる意匠と商標の出願は自分で対応するといった棲み分けをしていたのですが、勧められたので特許出願の相談に行ってみたんです」

さらに知財センターのアドバイザーについて、柳田社長はこう続けた。「ちょっとした文言を変えることによって、『ここをこうした方が、権利範囲が広がるのではないか』など、アドバイザーの意見が的確でしたね。私たちだけで考えていると、どうしても特許の幅が狭くなりがちなので、アドバイスをもらい非常に助かりました。おかげで、自分で出願することができました。公的機関にサポートしてもらい、力になってもらえるのは助かります」

時代の変化を感じながら知財を経営に役立てたい

さらに柳田社長は「特許出願の内容によって、ふさわしいやり方があると思います。昔はすべて特許を取ろうと考えていましたが、今は特許を取得するものと、出願せずノウハウにしておくものとに分けているんです。特に海外だと、特許によって情報が公開され、むしろマネされる場合もありますからね。それに、特許は持っていればいい、というものではなく、私は使わないものは捨てていくようにしています。維持費も結構かかりますからね。時代の変化を感じながら先のことを読んで、不要なものは手放し、大切なものは残すようにしているんです」と語る。知財を戦略的に考えながら、明日へと向かっている。

時代は変わる。その時々で、大切なものは何か？ 正しい価値観を見失わないようにしたい。それが、柳田社長の持論である。

以前、同社が先頭に立って屋上緑化の技術を築き上げた際には、あまり特許を取得しなかったが、市場を広げるためには逆によかったかもしれないと柳田社長は語る。「今までやってきたことに悔いなしです」との言葉がとても力強かった。

知財センターから

より強くメリットの生まれる特許表現を

すばらしい発明のアイデアであり、特許の取得においては明細書もすべて自前で仕上げられました。海外販路開拓の関係から、知財センターを紹介されたとのことで、国際的な視野も広く積極的な知財活用を行っているようです。より強い特許に仕上げるには、どのような表現にすればよいかなどをアドバイスしました。　担当：秋葉原　小澤アドバイザー

取材：2014 年 8 月